

源氏物語評釋

序文  
惣論上

首上



荻原先生著

初帙八冊

校正  
譯注

源氏物語評釋

鹿鳴草舎塾藏

多岐のあまのけり 池山 幸も 候ふま  
所か 秋を 冬 春 夏 秋 水の  
た ぬ じ ぎ 山 志 ね ぶ こと せ け け 光  
え け け せ 流 け け け け け け け け  
ゆ け け け け け け け け け け け け





先ずは後なる所の如く二かゝるに  
つししとて思ふ程に於て  
う先達といふものうちの  
るもあつたまゝに  
すまじ也と目撃するは  
る

此函のいふ如く加ふべき  
かきもろく人々集大成を  
いひたしむるにたいし  
以て先づかや文を  
いふるに事進士となり  
後め

しふふ大学の君いあしふの  
あしいまをいつらたれ廣道  
うふまに繩墨お心一い  
をふまを幸ふむめし  
初所のあしゆれ夕浪速の

大城いあしふ一はま

久具因幡守正典朝臣

源善堂主人













一 引歌の事	四十五丁
一 准據の事	四十六丁
一 卷々の名どもれ事	四十八丁
一 人々の名れ事	同
一 紀年の事	五十丁
一 系圖の事	五十二丁
一 此物語小種々の法則ある事	五十三丁
一 せりくらのこととまゝなる所れ事	六十六丁
一 頭書評釋凡例	六十八丁
一 本文譯注凡例	七十六丁
已上	

校正譯注源氏物語評釋首卷

菫原廣道著

惣論上

源氏物語といふ題号の事

源氏物語といふ名の事、本居翁の玉小掃タマコヅリ云々、大うさめらるゝの抄、此れ名の例、  
 切キレりてハヤ中ナカよ主ヌシとていふ人の名をめてはきこり、此抄後もそのでううむく、  
 光源氏ミチノリ君の事をむひとてうける、亦光源氏ミチノリの抄シヨとていふありき、さて  
 抄シヨの名、光源氏ミチノリの抄シヨといふべし、源氏物語といふべし、また、源氏といふ人  
 あらざるべし、とていふべし、や、能ノらぬ、の日記ニヒギも、源氏ミチノリの抄シヨとていへる  
 をや、といふ事、此説のごとく、さて源氏ミチノリ抄シヨハ岡部オカベ翁オウの源氏ミチノリ新ニホ叙キョよ云々、  
 國史クニシまゝ、新撰ニホニ姓氏シノジ録ロクあが、成案ナリノトキするに、嵯峨サカエ天皇テウ弘仁コウニ五年ゴよ、皇子ミコ信公シノキミ以下男  
 女八人メカ小始コハジメて源朝ミチノチ臣シノの姓氏シノジをカキり、左京サキヤウよツラ貴祢キネ姫ヒメひりより、皇子ミコ小氏コウヂ賜タマ























くべて考ふべし。大なるものなり。時の事とせば、もたつては、女とあはれち  
 小めらるゝは、いかに。相室の事、此、藤室の中、いかに。あつては、  
 朱雀院の事、此、秋、ぬす、あつて、いかに。あつては、  
 むづ、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 情を、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 な、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 中、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 王、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 の、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 を、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 め、いかに。あつては、いかに。あつては、  
 と、いかに。あつては、いかに。あつては、

御制度など、我皇國の事、いかに。あつては、  
 又、この男女、いかに。あつては、  
 うど、いかに。あつては、  
 天皇の、いかに。あつては、  
 定、いかに。あつては、  
 此、いかに。あつては、  
 得、いかに。あつては、  
 かん、いかに。あつては、  
 その、いかに。あつては、  
 かつ、いかに。あつては、











〇十六  
 〇十七  
 〇十八  
 〇十九  
 〇二十  
 〇二十一  
 〇二十二  
 〇二十三  
 〇二十四  
 〇二十五  
 〇二十六  
 〇二十七  
 〇二十八  
 〇二十九  
 〇三十  
 〇三十一  
 〇三十二  
 〇三十三  
 〇三十四  
 〇三十五  
 〇三十六  
 〇三十七  
 〇三十八  
 〇三十九  
 〇四十  
 〇四十一  
 〇四十二  
 〇四十三  
 〇四十四  
 〇四十五  
 〇四十六  
 〇四十七  
 〇四十八  
 〇四十九  
 〇五十  
 〇五十一  
 〇五十二  
 〇五十三  
 〇五十四  
 〇五十五  
 〇五十六  
 〇五十七  
 〇五十八  
 〇五十九  
 〇六十  
 〇六十一  
 〇六十二  
 〇六十三  
 〇六十四  
 〇六十五  
 〇六十六  
 〇六十七  
 〇六十八  
 〇六十九  
 〇七十  
 〇七十一  
 〇七十二  
 〇七十三  
 〇七十四  
 〇七十五  
 〇七十六  
 〇七十七  
 〇七十八  
 〇七十九  
 〇八十  
 〇八十一  
 〇八十二  
 〇八十三  
 〇八十四  
 〇八十五  
 〇八十六  
 〇八十七  
 〇八十八  
 〇八十九  
 〇九十  
 〇九十一  
 〇九十二  
 〇九十三  
 〇九十四  
 〇九十五  
 〇九十六  
 〇九十七  
 〇九十八  
 〇九十九  
 〇一百

〇論  
 〇一  
 〇二  
 〇三  
 〇四  
 〇五  
 〇六  
 〇七  
 〇八  
 〇九  
 〇十  
 〇十一  
 〇十二  
 〇十三  
 〇十四  
 〇十五  
 〇十六  
 〇十七  
 〇十八  
 〇十九  
 〇二十  
 〇二十一  
 〇二十二  
 〇二十三  
 〇二十四  
 〇二十五  
 〇二十六  
 〇二十七  
 〇二十八  
 〇二十九  
 〇三十  
 〇三十一  
 〇三十二  
 〇三十三  
 〇三十四  
 〇三十五  
 〇三十六  
 〇三十七  
 〇三十八  
 〇三十九  
 〇四十  
 〇四十一  
 〇四十二  
 〇四十三  
 〇四十四  
 〇四十五  
 〇四十六  
 〇四十七  
 〇四十八  
 〇四十九  
 〇五十  
 〇五十一  
 〇五十二  
 〇五十三  
 〇五十四  
 〇五十五  
 〇五十六  
 〇五十七  
 〇五十八  
 〇五十九  
 〇六十  
 〇六十一  
 〇六十二  
 〇六十三  
 〇六十四  
 〇六十五  
 〇六十六  
 〇六十七  
 〇六十八  
 〇六十九  
 〇七十  
 〇七十一  
 〇七十二  
 〇七十三  
 〇七十四  
 〇七十五  
 〇七十六  
 〇七十七  
 〇七十八  
 〇七十九  
 〇八十  
 〇八十一  
 〇八十二  
 〇八十三  
 〇八十四  
 〇八十五  
 〇八十六  
 〇八十七  
 〇八十八  
 〇八十九  
 〇九十  
 〇九十一  
 〇九十二  
 〇九十三  
 〇九十四  
 〇九十五  
 〇九十六  
 〇九十七  
 〇九十八  
 〇九十九  
 〇一百





































はあなやうなちやうと。此中ハ相違あるや。世の人はあつちいふやう  
かたがへにひかへてあつちいふやう。伏草のちやうとあつちいふやう。二つ  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。

物故の<sup>不方</sup>作よりあつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。  
あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。あつちいふやう。

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically from top to bottom. It begins with characters that appear to be "おのれ" (oneself) and continues with various phrases and words in a fluid, connected style.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes characters such as "いづれ" (whichever) and "調論と勸善懲悪" (discussion and encouragement of good, punishment of evil). The writing is consistent in style with the previous page.







すべて源氏君のうへに、業あえたりゆをかん<sup>カ</sup>と、操へしるふに、あはざる事とある  
 なる。源氏君の業をそののちとて、おとんとあはるべし。かゝる事ありしに、  
 をばまがれて、世の上の事も、厚のちふらふ。柏木のごりも、こゝろよへ  
 のごりも、いふは、おがくべし。事あるを、かゝりた。この事をも、あはるべし。か  
 ら、おのまがれ、報應<sup>ムシイ</sup>を示さる。のち、いふ。こゝろよへ、源氏君の、  
 業、ハ、タ、ま、か、方、長、の、う、こ、ふ、と、あ、相、重、美、帝、の、は、ま、ら、朱、雀、院、の、は、ま、の、こ、よ、  
 定、あ、致、仕、大、臣、の、末、ハ、紅、梅、大、臣、と、あ、り、も、安、友、氏、が、い、ふ、ご、り、  
 め、の、用、意、あ、り、し、る、ま、た、さ、る、べ、し。は、て、ま、あ、り、た、上、天、宮、お、て、や、み、ぬ、る、と、  
 作、ら、ぬ、の、海、へ、い、ら、し、る、の、ご、り、と、く、操、衣、ぬ、る、を、後、と、う、お、し、  
 と、い、ふ、事、も、相、重、美、の、お、人、の、い、ふ、も、厚、を、い、は、れ、お、し、の、い、ふ、も、は、り、  
 せ、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、但、し、  
 せ、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、又、く、操、衣、

を、い、て、か、の、大、將、を、信、お、し、し、る、事、と、な、す、し、て、業、を、ま、し、る、ご、り、と、  
 あ、り、し、る、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、但、し、  
 う、し、る、の、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 は、り、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 あ、り、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 御、臣、<sup>ミヤノウヂ</sup>と、な、り、ま、す、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 大、將、位、を、<sup>半</sup>、  
 べ、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 を、後、お、し、る、例、の、出、ま、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 例、の、出、ま、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 お、し、る、ご、り、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、  
 一、と、い、ふ、事、も、い、は、れ、ぬ、ご、り、と、い、ふ、事、も、一、





